



## 経営も人生も豊かにする「対立的統一」という「楕円思考」

「対立的統一」「矛盾の同一性」、普段あまり耳にしな  
い言葉かもしれない。陰と陽はいずれか一方だけでは  
成立せず、「対」になる2つ」が対立したり矛盾したり  
しながらも、2つが1つになってはじめてその存在が  
成立すると考えるのである。

筆者が、この考え方を学んだのは、常盤文克氏から  
である。常盤氏は、理学博士でもあるが、「易経」にも  
精通しており、花王の会長も務めた方である。

この考え方を教えていただいてから、私は物事の対  
極にあるものは何かを考えるようになった。そうする  
ことで、自分自身の視野や考え方などに偏りがあるこ  
とに気づかされる。こうした気づきをもてると、他者  
の意見にも自然と耳を傾けるようになり、自分の対極  
を考えながら聞くことができる。それが、狭い考えに  
陥らないことにつながる。

常盤氏がこの3月に新刊上梓された『楕円思考で考  
える 経営の哲学』（発行：日本能率協会マネジメント  
センター）では、自分を中心において物事を考える「円  
思考」は、一極思考であると指摘する。それに対し、  
2つの円思考を接近させて重ね合わせて、2つの焦点を  
もつ「楕円思考」へ変えることが「対立的統一」「矛盾  
の同一性」であると解説している。本書は、ビジネスパー  
ソン向けで、経営のあり方を提唱しているのだが、あ  
えて本書の底辺に流れる本質に触れるならば、私は、  
豊かな生き方や仕事のよいあり方を提唱しているもの  
として読ませていただいた。

イノベーションが今後さらに求められるが、2つの  
円の交わる部分に、イノベーションの種があるはずだ。  
イノベーションにとって、対象となる極は、1つだけ  
ではないだろう。さまざまな対極を探し、数多くの交  
わる部分からその種を見つけてほしい。そうした新しい  
発見のためにも、「楕円思考」を理解されることをお勧  
めする。

まだ、ご存じない方には、真に豊かで幸せな世界と  
は、企業とは、経営とは、人生とは、といったあらゆる  
ことを考えるための“道具”として、「対立的統一」「楕  
円思考」を身につけていただきたい。

（編集室 フンビン 文斌）